

♪ピースボート乗船記①『アジア編』♪

石井瑛美さんは今年の実行委員会ニュース1号で紹介した「世界の子どもたちへ楽器を届けよう」“ピースボートUPA国際協力プロジェクト”に参加してきました。

□関東アコのみなさん初めまして、私は去年の11月から音楽センターの土曜教室でアコーディオンを学んでいます。今回念願の夢が叶いピースボートにて、世界一周の航海にいつてきました。出港に先立って教室生から、寄港地でのアコ風景を撮ってきてくださいとの依頼があり、その場面に遭遇する事が出来たので、乗船記として皆さんにお届けいたします。

4月16日、横浜港から船に乗り込んだ後、そのまま甲板にて家族と友達に大声で行ってきますと何度も叫んだ(写真は出港直後の様子 4/16)。

「とにかく楽しんでくる！」そう笑顔で叫び、何度も何度も別れを告げるが船は出港の時刻を過ぎても出ない。飛行機の旅行と違って、じゃあねとお別れの挨拶をしてもなかなかお別れ出来ないのだが、私は早く行ってしまいたかった。この日はまさかの霰が降るほど冷え込んで岸壁に向けて振る手はすでに感覚がない。私はロシアで着る予定だった厚手のコートを着ていたからまだ良かったものの、家族も友達も私のために凍りつきながらも手を振り続けてくれていた。船の仲間とみんなで肩を組んで歌を唄ったり、マイケルのスリラーダンスしたり、これから楽しい旅が始まるのだと期待が膨らんだ。

出港の汽笛が鳴り響き、その間隔が短くなるにつれ本当にこれから3ヶ月の旅が始まるんだとこの時にしてやっと少し

音楽センター中部土曜教室 石井瑛美 19歳

実感が湧いてきた。船は徐々に大棧橋から離れて、最初の寄港地アモイ(中国)へ向け出港しました。

船の食事は朝は和食と洋食を選ぶことができて、いつも私はパンとソーセージとサラダでご飯とみそ汁が恋しくなったら和食を食べ、どっちも食べたい時は、和食と洋食とが別階にあるから両方食べに行ったりもできる。昼はバイキングだから好きなものを好きなだけ食べられる、毎日違うものが出るから、日本に帰ったら食べたいと思うものが無くなってしまったくらいです。夜はフルコースだからデザート付、なかでもレアチーズケーキのベリーソース添えが一番！

アジアでは、アモイ、ダナン(ベトナム)、シンガポールの順に寄港する事になっている。

アモイではコロンス島に行ったが、島と聞くからには古い家屋や商店が並び、都会と違った温かみのある自然の残る場所を思い浮かべていましたが、しかし実際には、大きい銀行やオシャレなカフェ、fast food が立ち並び、島の大半は古いショッピングセンターのようだった。

一方、エスカレーターはほこりをかぶっていて、故障の為に階段として使われているのもあった。島の反対側は住宅街だったが古ぼけてスラム街のような印象だった。でも食事は最高においしかった、屋台にはメニューがないから、写真のパネルが貼ってあるところを探して、指さしながら適当に頼んだのだが、単なる野菜炒めでもすごくおいしかった。とはいっても次に中国に来ることがあっても、2回目は行かない…かな？

ダナンでは現地の中学生在が私たちを出迎えてくれ、グループに分かれて食事に



出かけた。移動手段はバイク、私は女子中学生(13)の後ろにつかまり、バイクだらけの道をすり抜けながら、ちょっと道を行き過ぎると逆走し、日本では味わえない恐怖とスリリングさがたまらなくよかった。

ベトナム料理を食べた後は大きなホールにてダンスパーティー、ベトナムと日本の音楽を歌って踊って、400人近くがホールにびっしり入ると、その熱気はすさまじく、そこにいるみんなが汗びっしょりかきながら、爆音がホールに響き渡る中での友達との会話は相手の耳に叫ばないと会話できないほど、そんな中数時間も疲れ知らずで踊りまくるという爆発的な燃焼の仕方はなかなかできない体験。

次に寄港したシンガポールはゴミひとつないきれいな街だった。道路も整備されていてビルが立ち並び、少し外れると、道を挟んで向こう側はインド、こっちがアラブ、向こうがチャイナというように小さな国が集まったような街が広がっていて不思議な場所だった。

船酔いは苦しいものとよく聞いていたが、私は揺れに比較的強いほうで、心配していたほどではなかった。激しく酔ったのは横浜出港後と、最後の寄港地メキシコを出港した後の太平洋だけで、その時は酔い止めを飲んで寝て忘れるしかなかった。私の部屋は船の中央だったから他と比べたら、まだ揺れは弱かったみたいだったから運が良かった。

シンガポールを出港して中東エジプトに向かう途中のアラビア海のあたりで、私はプールがあるデッキに出て友達と星を見ながらおしゃべりをしていた、すると緑の花火のような光の線が空に上がっていくのが見え、パンと音をたてた。みんなできれいだね〜と話しているとそれが3発くらい上がったところで、乗組員に船内に入るよう言われ、訳も分からず各自部屋に行くように言われた。もしかして海賊？こら辺は海賊地帯で船の前後を海上警察

に守ってもらってるくらいだし…。その時放送で暗号らしき単語が何度も繰り返される。これは絶対やばい！まだ0時前だけど、みんなは興奮状態だった。

もちろんすぐに部屋へは行かないが、一応人が集まる階に降りて行こうとしたとき、船は徐々に左右に大きく揺れ始め、階段を降りようとしても傾きがきつい時は階段の角度が垂直になりそうなくらい傾くから、平らになった時を見計らって駆け下りる。手すりにしがみつきながら正面の壁にぶつかりながらやっとの思いで辿り着くと、柱につかまりながらみんなもカーキヤー騒いでいた。ライフジャケットを着た乗組員が「ダイジョウブ」と言ってくれたが、それを言われて余計に大丈夫じゃないと感じた。「タイタニックだ！沈没する」とか、みんなで盛り上がり、みんなのテンションはさらに高くなる。さっきの花火も威嚇のために打った球だったようだし…。

少しすると、部屋に入って鍵を閉めるようにと言われた。部屋に入っても外の状況が解からず、もしかしたらという恐怖感があったが、いつの間にか寝ていて気が付けば朝になっていた。後で知っただけで、この揺れはジグザグ走行と言って怪しい船が近くに来た時、波を立ててけん制するために行うらしい。この事件はどこかのインターネットニュースに載っていたらしい(笑)。

船ではいろんなことがあるから、楽しいのだ。

写真はイタリアのアコーディオニスト(5/21)



=続<=

